

浦島太郎

氏名

<p>(一)</p>	<p>昔々浦島は 助けた亀に連れられて 龍宮城へ来てみれば 絵にも描けない美しさ</p>
<p>(二)</p>	<p>乙姫様のご馳走に 鯛や鮓の舞い踊り ただ珍しく面白く 月日のたつのも夢のうち</p>
<p>(四)</p>	<p>(五)</p>
<p>帰ってみればこは如何に 元居た家も村も無く 道に行き合う人々は 顔も知らない者ばかり</p>	<p>心細さに蓋取れば 開けて悔しき玉手箱 中からぱつと白煙 たちまち太郎はお爺さん</p>
<p>(三)</p>	<p>遊びに飽きて気がついて お暇ごいもそこそこに 帰る途中の楽しみは 土産にもらった玉手箱</p>

「御伽草子」の四季折々の景色の描写

さて女房申しけるは、「これは龍宮城と申すところなり、此所に四方に四季の草木をあらはせり。入らせ給へ、見せ申さん」とて、引具して出にけり。まづ**東**の戸をあけて見れば、春の景色と覚えて、梅や桜の咲き乱れ、柳の糸も春風に、なびく霞のうちよりも、鶯の音も軒近く、いづれの木末も花なれや。**南面**を見てあれば、夏の景色とうち見えて、春をへだつる垣穂には、卯の花や、まづ咲きぬらん、池の蓮は露かけて、汀涼しきさゝなみに、水鳥あまた遊びけり。木々の梢も茂りつゝ、空に鳴きぬる蟬の声、夕立過ぐる雲間より、声たて通るほととぎす、鳴きて夏とや知らせけり。**西**は秋とうち見えて、四方の梢も紅葉して、ませの内なる白菊や、霧たちこむる野辺の末、まはぎが露を分けくぐて、声ものすごき鹿の音に、秋とのみこそ知られけれ。さて又**北**を眺むれば、冬の景色とうち見えて、四方の木末も冬がれて、枯れ葉に置ける初霜や、山くくやたゞ白妙の、雪に埋もるゝ谷の戸に、心細くも炭竈の煙にしるき賤がわざ、冬と知らする気色哉。